

日本英学史学会 第61回全国大会

《創立60周年記念大会》

「宣教師, お雇い外国人の来日と英学史」

プログラム・発表概要



期日 2024年10月26日(土)~27日(日)

会場 敬愛大学(新1号館6階1602教室)
〒263-8588 千葉市稲毛区穴川1-5-21 TEL: 043-251-6363

日本英学史学会本部事務局連絡先
〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4-14 拓殖大学政経学部
矢ヶ崎 邦彦 研究室内
TEL&FAX: 03-3947-7111

主催

【協力学術研究団体】

日本英学史学会

Historical Society of English Studies in Japan

協賛

日本聖公会歴史研究会

大会日程

●10月26日(土)

12:30 開場・受付開始 《新1号館 6階 1602 教室前》

13:00 開会の辞 司会：矢ヶ崎 邦彦（事務局長）
保坂 芳男（東日本支部長）

13:05 学会長挨拶
西口 忠（会長）

13:10～14:45 総会
総会司会：赤石 恵一（副会長）
1. 学会活動報告：西口 忠（会長）
2. 会計報告：矢ヶ崎 邦彦（会計委員長）
3. 豊田賞発表：飛田 良文（豊田賞選考委員長）
4. 支部活動報告：各支部長

15:00～16:00 記念講演
中原康貴氏（日本聖公会司祭 高知聖パウロ教会牧師）
「アメリカ聖公会の歩みとグローバルインパクト」

16:00 事務連絡
矢ヶ崎 邦彦（事務局長）



16:15～17:00 特別展示史料見学 《豊田賞作品ほか貴重英学史文献・史料》

17:30 懇親会 《和創旬彩 くうひな》
稲毛区稲毛東 3-8-13 (B1F)
TEL: 043-302-5141

《大会役員》

大会会長：保坂 芳男

大会実行委員長：増井 由紀美

大会実行委員：西口 忠, 飛田 良文, 赤石 恵一, 矢ヶ崎 邦彦, 田辺 陽子

●10月27日(日)《新1号館6階1602教室》

10:00~11:40 研究発表【午前の部】 司会: 保坂 芳男

10:00~10:25 「札幌農学校2期生の学習履歴」

赤石 恵一 (日本大学)

10:30~10:55 「明治・大正期における聖公会の北海道伝道とアイヌ民族:

女性宣教師ミス・ブライアントの20年」

田辺 陽子 (東海大学[非常勤])

11:00~11:25 「*Tourists' Guide*(1880)編纂者 W. E. L. Keeling の日本での足跡」

千代間 泉 (同志社女子大学[非常勤])

11:25~11:40 質疑応答

11:40~13:00 写真撮影・昼食

13:00~14:40 研究発表【午後の部】 司会: 田辺 陽子

13:00~13:25 「東京府立第一中学校の英語教育に関する研究:

川田校長時代(明治42年度)以降に焦点を当てて」

保坂 芳男 (兵庫大学)

13:30~13:55 「岡倉由三郎『外国語教授新論』(1894年)考:

勝浦鞆雄校長下の東京府尋常中学校との関係に着目して」

平田 諭治 (筑波大学)

14:00~14:25 「第一次世界大戦下での知識人の仕事:

朝河貫一(1873-1948)と J. W. ロバートソン・スコット(1866-1962)」

増井 由紀美 (敬愛大学)

14:30~14:55 「豊田實と英語, キリスト教・日本人教師・宣教師:

豊田實の二つの自伝資料から」

西口 忠 (桃山学院史料室 特別研究員)

14:55~15:10 質疑応答

15:10 閉会の辞

飛田 良文 (副会長)

《参加費》

*2000円（事前振り込み制）

*当日は会場受付にて出欠の確認にご協力ください。記念誌をお渡しいたします。

《諸注意》

*大会出席の折には、各自、本プログラムを印刷のうえご用意ください。

*会場内は禁煙です。所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。

*会場における録音・録画はお断わりしています。ご了承ください。

*発表時にハンドアウトを用意される方は、20部程度印刷のうえご用意ください。

*会期中、大学構内の売店は閉まっています。昼食はあらかじめご用意ください。稲毛駅構内および周辺に食料品店がございます。



《交通》

(1) JR 総武線・総武快速線 稲毛駅東口より京成バスで約5分(徒歩で約15分)。

2番のりば「稲31 山王町行き」「稲32 千葉センター行き」「稲33 ザ・クィーンズガーデン稲毛行き」で2つ目「放医研正門前」下車。現金払いは¥100とお得です。

(2) バスを降りて、進行方向にドーム型体育館(敬愛アリーナ)が見えます。2分程で横断歩道。そこを渡ってすぐの門(アリーナ門)から入ってください。目の前の7階建3号館の中でもグランド側のサイドウォークでもまっすぐ進むと9階建新1号館の入り口になります。ここの6階1602教室が会場です。天气が良いと富士山が見えます。

《宿泊案内》

*各自で宿泊予約してください。

ダイワロイネットホテル千葉駅前, ダイワロイネットホテル千葉中央, ホテルサンルート千葉, 東横 INN 千葉駅前, 三井ガーデンホテル千葉など多数。

発表概要 午前の部

札幌農学校 2 期生の学習履歴

赤石 恵一（日本大学）

札幌農学校は 1876(明治 9)年 8 月に開校した開拓使の高等教育機関である。当時マサチューセッツ農科大学の学長だった W. S. Clark が教頭として招聘されその教育にあたった。最初期の教師は漢学担当のほかは皆, Clark の教え子だったアメリカ人であり, その教授言語は英語であった。英語イマージョンということになる。2 期生として 18 名が入学, うち 10 名が卒業生した。卒業生のうち 7 名が東京大学予備門(旧東京英語学校), 3 名が工部大学校から入学しており, いずれも札幌農学校に先がけて外国人教師から英語イマージョン教育を受けていたことが分かっている。2 期生の英語熟達度の高さは先行研究によりこれまでも指摘されてきた。しかし, 2 期生がそのような熟達度に達するまでどのような学習を行ってきたのか, その経歴や学習の実態を明らかにした研究はなく, 何人かの学生に関してはその出自すら詳らかにされていない。本発表は, 発表者が継続している札幌農学校 1~5 期卒業生 70 名を対象とした英語学習成功者研究の一断片である。2 期卒業生 10 名に焦点を絞り, その出生から札幌農学校入学までの学習の軌跡を辿ったうえ, その共通点や特徴を分析する。後に宗教家として知られる内村鑑三, 国際連盟事務次長新渡戸稲造, 北海道帝国大学総長南鷹次郎, 東京帝国大学教授広井勇らはこの札幌農学校 2 期生であり, 1877(明治 10)年 4 月の Clark 離札後に入学した学生である。

明治・大正期における聖公会の北海道伝道とアイヌ民族：
女性宣教師ミス・ブライアントの 20 年

田辺 陽子（東海大学[非常勤]）

イーディス・メアリー・ブライアント(Edith Mary Bryant・1857-1934)は、英国聖公会宣教協会(CMS)の女性宣教師としてアイヌ民族への伝道活動に長く取り組んだ人物である。CMSは1874年に宣教師を初めて函館に定住させ、アイヌの人々に対する伝道活動を他の宗派に先駆けて開始した。その後、アイヌ女性や子どもの受洗者が増加した結果、沙流地方での伝道活動を行うべく選ばれた女性宣教師が、ミス・ブライアントである。彼女はロンドンのガイズ・ホスピタル等で看護婦として長年勤務しており、医療伝道という観点からも適任とみなされた。1898年から「アイヌの古都」と呼ばれていた平取町にたった一人で定住し、1922年に離日するまでの(休暇を除く)約20年間をアイヌ民族のために尽くした。

日本の近現代史において、キリスト教系ミッションスクールと女子教育に関する研究は数多くあるが、女性宣教師によるアイヌ子女への教育および伝道活動についてはこれまでほとんど注目されてこなかった。そこで、本報告では英国に残されたミス・ブライアントに関する史料(ガイズ・ホスピタルの資料、CMS本部への年次報告書等)から、具体的な活動例を取り上げる。また、女性宣教師に関するCMSアーカイブス史料は(男性宣教師と比較すると)全般的に少ないため、それを補完するために平取のミス・ブライアントと交流した人々の記述も幾つか紹介する。中でも、平取在住のアイヌ伝道師による回想録や、平取を訪問した津田梅子の書簡は興味深く、信者から見たミス・ブライアントの姿や明治・大正期のアイヌに対する一般的な見方を伝えてくれる。史料を丹念に読み解く中で、女性宣教師としてアイヌコタンに定住したミス・ブライアントの宗教実践やアイヌへの影響、信者との繋がりを明らかにしたい。

Tourists' Guide(1880)編纂者 W. E. L. Keeling の日本での足跡

千代間 泉 (同志社女子大学[非常勤])

明治初期の英文日本ガイドブックの嚆矢として、*Tourists' Guide*(1880) (以下ツーリストガイド)がある。

ツーリストガイドの編纂者は、キーリング(W. E. L. Keeling, 1843-1883)である。伊藤久子(2009)「研究余話:旅行ガイドブックの著者キーリング」¹ は、キーリングについて「何の手がかりもなく、いかなる人物か何もわからなかった。それが後に思いがけぬところで手がかりを得、少し解明することができた。」と記した。それは「福沢諭吉の書簡から新たな足跡を発見し」(伊藤, 71)たことであった。

キーリングは、日本でどのような生活を送り、ガイドブックを編纂するに至ったのだろうか。キーリングの日本での生活を知ることにより、ガイドブック本来の研究にも生かせると考える。

調査は困難であったが、2 人の研究者とキーリングにゆかりのある寺の住職の協力のもと、資料をご教示・提供頂き、研究するよう託された。結果、キーリングの人物像と日本での行動が全てではないが、つながり判明した。

キーリングはイギリス人である。1872 年 1 月にフランスマルセイユから日本に向けて出港した。1873(明治 6)年 2 月～7 月末までの東京での英語教師の生活ののち、江原素六に雇われ、同年 12 月～7 年 6 月まで、沼津市での英語教師・宣教師として活動した。日本人と結婚し、幼子を亡くし、沼津市の本光寺に埋葬した。日時は不明であるが、のちに元教え子が東京の住所を訪問し、不遇な様子を気にかけた。キーリングの最後の「雇い」記録としては、1879(明治 12)年 3 月～12 月の福沢諭吉の慶応義塾、がある。その後、彼は *Tourists' Guide*(1880)を編纂したとみられ、その序文は 1880 年 2 月付である。その後の行方は本調査においても不明のままである。彼はイギリスに帰るべく出国し、洋上にて 1883 年 8 月 10 日に亡くなり、水葬された。

興味深いことにキーリングについての研究は、沼津での宣教師兼英語教師、ガイドブック編纂者、という二手に分かれて進行していたようだ。沼津関係の資料からは、キーリングがガイドブックの編纂者であることを認識する記述は今のところ見受けられない。

本発表では、収集した資料をもとに、キーリングの日本での生活を時系列にまとめ、その詳細を述べる。

¹ 伊藤久子「研究余話:旅行ガイドブックの著者キーリング」『東日本英学史研究』8, 71-73, 2009 年。

発表概要 午後の部

東京府立第一中学校の英語教育に関する研究：
川田校長時代(明治42年度)以降に焦点を当てて

保坂 芳男 (兵庫大学)

昨年度の発表「東京府立第一中学校の英語教育に関する研究」では、主に創立当初から9代目勝浦鞆雄校長までの英語教育の実態を明かにしてきた。この時期は受験体制の確立・充実の時期であり、勝浦校長は、「天下の一中というか、中学校としては最高の位置にまで本校を引き上げた」(『日比谷高校百年史』上, p. 94)。その内容は24年発行予定の『英学史研究』(第57号)に掲載予定である。

本研究は、それを踏まえて、勝浦校長辞任後第10校長になった川田正澂校長時代、いわゆる日比谷後期時代以降に焦点を当てて、戦前の日本を代表する中学校の外国語教育の実態を述べるものである。

勝浦が受験校としての地位を確立させた反面、高知県出身の川田はリベラル教育の推進を目指した。川田は、欧米視察(大正2年3月末～大正3年6月初)を経てイートン校、ハーロー校をモデルに学校改革を行った(同上, pp. 110-111)。

川田は最も在職期間が長く、校長として19年10月、校長事務取扱として3年3月(東京府立高校校長と兼任)、計約23年の勤務であった。この期間で、多くの改革を主体的に行い、この時代は日比谷時代後期とも呼ばれている。主な発表の内容は以下の通りである。なお、個々の詳細は学会発表当日に明らかにしたいと考えている。

- ① リベラル教育の推進
- ② 英語教育の充実
- ③ 川田教育の挫折

当時の日本人英語教師として中西保人(1868-1939)、細江逸記(1884-1947)、隈部富良、岡田明達(1876-?)、蒔田栄一(1902-1974)らの経歴、授業の様子を明らかにしたい。一方、外国人講師として Florence E. Boynton, Mabel Guppy(1879-不明)、George H. Grant(1863-不明)らの経歴、授業の様子を明らかにしたい。

岡倉由三郎『外国語教授新論』(1894年)考：
勝浦鞆雄校長下の東京府尋常中学校との関係に着目して

平田 諭治 (筑波大学)

戦前の日本の英語・英文学者として知られ、英語教育の制度化に尽力した岡倉由三郎(1868-1936)の活動と思想については、拙著『岡倉由三郎と近代日本——英語と向き合う知の軌跡』(風間書房, 2023年)で検討・考察した。けれども国家の教育政策・文部行政とその推移, 勤務校のあり方とその職務に即して, かれの教育・研究活動を総体的に省察する作業は今後に残されている。本発表がその一環で探究するのは, 岡倉が1894(明治27)年1月から勝浦鞆雄校長下の東京府尋常中学校に嘱託として勤務し, 4月より外国語科主任を務めたこと, そして9月に『外国語教授新論 附国語漢文の教授要項』を著述・発表したことである。

『外国語教授新論』について論じた先行研究には, 内丸公平「新事物を教ふるに當りては必ず既に知れる事物と比較し」——岡倉由三郎「外国語教授新論」に於ける英語教授法とその教育的背景」(『国学院大学紀要』第52巻, 2014年)がある。内丸は同書が「当時の教育学であるヘルバルト主義の原理」から導かれ, 岡倉が「普通教育を念頭に英語教授法を思量した」ととらえたが, はたしてそうであろうか。榎木貴之『国語教育と英語教育をつなぐ——「連携」の歴史, 方法, 実践』(東京大学出版会, 2023年), 水野の『日本人は英語をどう訳してきたか——訳し上げと順送りの史的研究』(法政大学出版局, 2024年)は, 内丸論文を参照しながら同書に言及しているが, 岡倉の議論の一部を切り取って表面的になぞっているにすぎない。

東博通「岡倉由三郎の英語教育論はどのようにして生まれたか」(名城大学経済・経営学会編『名城論叢』第20巻第3号, 2020年)は, 岡倉の考え方の「集大成」で「長く我が国の英語教育の指針ともなった」という、『英語教育』(博文館, 1911年)にいたる「英語教育論の形成過程」をまとめている。『外国語教授新論』との比較や変化にも言及しているが, やはり表面的・概括的で事実誤認や検証不足の点が少なくない。拙著も「外国語教育についてのかれの最初の著書」として同書を取り上げているが, その経緯・背景や内容・特徴を掘り下げることができていない。

そこで本発表では, 当時の井上毅文相下の文部省令「尋常中学校ノ学科及其程度」, 勝浦校長下の「東京府尋常中学校教授綱要」との関係問いながら, 岡倉が『外国語教授新論』を著すにいたったいきさつや動機を探り, あらためて同書の議論とその性格ならびに位置づけを考えたい。

第一次世界大戦下での知識人の仕事:朝河貫一(1873-1948)と
J. W. ロバートソン・スコット(1866-1962)

増井 由紀美 (敬愛大学)

1895年12月に横浜を出航し、半世紀以上をアメリカの地で過ごすことになった朝河貫一は、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と3つの国際紛争に対して、歴史家としての役割を果たそうと心がけていた。朝河が遺した史料がこれを証明するが、日露戦争時には、数多の講演、学術出版、調査・取材活動を行い、太平洋戦争にあってはそれを阻止するためにラングドン・ウォーナーの発案で「ルーズベルト大統領から昭和天皇への親書(案)」作成し、ワシントンへ届けたことは今尚語り継がれている。

今回取り上げる、第一次世界大戦時に関しては、恩師坪内逍遙へ宛てた手紙が公開され『早稲田学報』249号(1915年11月)に掲載されている。朝河は、戦時下であるからこそ見えることがあるはずだと、1915年6月はじめイタリアに向かって出航し、フランス、イギリスと三国で調査にあたった。友人に遺書を書くほどに緊張を強いられた滞在であったが9月末無事ニューヨーク港に戻ることができた。

同じ年、J. W. ロバートソン・スコットが来日。彼は日本の農業に関心があったが、翌1916年駐日英国大使ウィリアム・カニングム・グリーンからの依頼を受け反独親英的な内容の読み物を次々に著し、『日本、英国及世界』『英語と英語気質の研究』『Ignoble Warrior(是でも武士か)』が日英両言語で出版された。

この頃ニューヘイブンの朝河は、日本での調査研究の必要性を強く感じており、研究休暇を申請。イエール大学より東京大学史料編纂掛への留学許可を得て、1917年7月から1919年9月まで日本に滞在することになる。

拙論「朝河貫一の日記に表れた国際化時代の日本:1917-1919」を著したのは2006年のことであるが、この中にJ. W. ロバートソン・スコットとの出会いについてわずかに触れてある。今回の報告では、戦時下の異国をジャーナリストは、或いは研究者は、どのように伝えるか、朝河の語りとスコットのそれとの比較分析を試みたい。

ロシアとウクライナの戦争も、イスラエルによるガザ地区の攻撃もまだ続いている。知識人にできることは何か、という終わらない問いの中で、今回は本テーマに挑戦することにした。

豊田實と英語, キリスト教・日本人教師・宣教師:
豊田實の二つの自伝資料から

西口 忠 (桃山学院史料室 特別研究員)

日本英学史学会初代会長には二つの自伝としての報告、著書がある。ひとつは第 5 回記念大会(昭和女子大学, 1968.9.28)で報告した「明治大正の英学—私の歩んだ道」であり、『日本英学史研究会 研究報告』第 100 号にある。もうひとつは豊田實逝去後に出版された『私の歩いて来た道』(松柏社, 1973)である。

二つの自伝を見ると、前者はわずかB5版3ページ程度の報告であり、後者は166ページ程度ある。キリスト教との関り、英語教育、通訳などを通して様々な人物との接点があるが、前者の短い資料にあって後者の資料には書かれていない人物、後者の自伝に出てくる重要な人物を見るとき、豊田實の幅広い交友関係が分かる。

「明治大正の英学—私の歩んだ道」の中で、「私は福岡県出身ですが小学校時代に教科外に英語を習いました。その時の教科書は当時流行のナショナル・リーダーでした。明善中学に入ってから私の得意な学科は植物で採集に夢中でした。この頃英語を教えて貰った先生は金成、飯牟礼(Iimure)、帷子(Katabira)など奇名の先生方でした。」とある。この三名の名前は『私の歩いて来た道』には出てこない。ここで注目すべき人物は飯牟礼である。

また、青山学院時代には和田正幾(まさちか)、浅田栄次、岡田実[哲]蔵、船橋雄(たけし)に学んでいるが、『日本キリスト教歴史人名事典』に経歴が出ている。また船橋雄以外は外来成訓編著『日本英学者人名事典』(森の人, 2024)に詳しい。

また「青山学院時代加奈陀ミッションの Scholarship を受けて勉学し、卒業後本郷教会の副牧師をしたこともあり、青山、東大在学時代を通じて外人との接触が断えず、語学の面では裨益することが多かったようです。」と報告している。この副牧師時代に『私の歩いて来た道』では「教会青年の宗教指導に当たった」とあり、その中に「後ですぐれた学者とな」った本多平八郎がいた。豊田實と繋がりがあったことは新しい発見である。

なお、宣教師については全国大会で少し触れる予定をしている。